蔵持市民センターだより

2025 年
3 月号
No.495

編集・発行 蔵持市民センター（事務所 平日 9:00～16:00） TEL/FAX 0595-63-0235 HP https://www.emachi-nabari.jp/kuramochi

感謝 伊和新聞 今までありがとう！～大正 15 年 創業９８年の歴史に幕～

大正 15 年に創刊してから、98 年もの間、地域の皆様と共に喜び、悲しみ、歩んできた地域密着型の「伊和新聞」。伊賀、名張市の情報はもちろんのこと、蔵持小学校の行事や授業、蔵持地区のイベントなど蔵持地域の温もりを伝える存在であり続けたことに深い感謝を捧げたいと思います。

人々の暮らしに寄り添ってきた昭和の面影を残すタブロイド版の伊和新聞。伊和新聞は、デジタル情報が溢れる現代においても、地域に密着するメディアの大切さを再確認させてくれます。

▲笑顔で記者生活を振り返る千種さん

しかし、情報の大海原が漂う現代では、その情報発信の形の多さから現在の形での継続は難しく、**伊和新聞は 2025 年 3 月末に静かに歴史の幕を下ろすことになりました。**

伊和新聞の記者として情熱を注いだ千種啓義さん。千種さんは、乃村工藝社で数々の建築物を手がけてきました。国宝となった「船形埴輪」を所蔵する松阪市文化財センター「はにわ館」も千種さんが手がけたものです。そんな素晴らしい企画や建築物を手がけた経歴を持つ千種さんは **79 歳で転身、第二の人生を新聞記者としてスタート**しました。

初出勤は市役所や商工会議所の新年祝賀会。記者たちが集まる中での初めての取材で「カメラで写真を撮ることもままならなかった」とのこと。そこからの 3 年間「無我夢中」で猛勉強をして駆け抜けていた。」と千種さん。他の記者が目を向けない場所、他の記者が書かない視点で、知られざる名張の歴史を掘り起こしてきました。そこには、常に地域への温かい愛情と、読者への真摯な想いが溢れています。

「この歳になって、**世の中のど真ん中にいる仕事ができて幸せだった。**」と千種さんは語ります。市政の動き、日々のゴミ収集、子どもたちの給食… 地域の「今」を学び、記事にすることで、人々の暮らしに寄り添いました。この 3 年間での休日は 1、2 日しかなかった多忙な日々でしたが、「とにかくたくさんの人との出会いがあり、毎回、好奇心を満たされていました。」と、記者という仕事に喜びを見出していたそうです。

そんな千種さんに、心に残った記事を伺うと「**3 年間、どの取材もとにかく無我夢中**で“特に心に残った”というものはないんです。全てが終われば、思い出して懐かしむこともあるのかも知れないですね。」と語る千種さんは最後の最後まで現役新聞記者。

相棒の Nikon カメラと共に 3 月 29 日に最後の取材まで走り切ります。

「記者を辞めたら、今度は自分の目で写真をたくさん撮って行きたい。」と語る千種さんの、新たな挑戦を心から応援したいと思います。

伊和新聞が繋いだ地域の絆は、これからも未来へと、大切に受け継がれて続けてくれることでしょう。また、千種さんの次なる冒険への期待と、かつての伊和新聞があったことへの感謝をここに記します。

伊和新聞、そして千種さん。長きに渡り、蔵持地区の歴史を紡ぎ、地域の温もりを伝えてくれて、本当にありがとうございました。

▲千種さんの取材時の相棒の Nikon のカメラ

▲取材で撮影した赤目の滝を見せてくださいました